

震宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第131号
 令和元年7月14日発行
 和歌山県伊都郡高野町高野山306
 公益財団法人高野山文化財保存会
 高野山霊宝館
 電話0736-56-2029
 URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■ 開館時間
 5月1日～10月31日
 8時30分～17時30分
 11月1日～4月30日
 8時30分～17時00分
 休館日 年末年始のみ

■ 拝観料 大人 600円
 高・大学生 350円
 小・中学生 250円
 高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■ 専用駐車場あり



国宝 澤千鳥螺鈿時給小唐櫃(部分) 金剛峯寺 大宝蔵展にて通期展示
 水辺に遊ぶ小鳥たち。白い部分は薄く切った貝をはめ込んだ「螺鈿」の技法です。

第40回大宝蔵展
高野山の名宝
—きらめく漆工の美—
 7月20日(土)～10月6日(日)

第131号 目次

- 大宝蔵展のご案内…………… 2～3
- 収蔵品の紹介103…………… 4
- 高野山の古建築第三十四回…………… 5
- 特集 平成三十年度の文化財保存修理事業…………… 6～7
- 高野山の考古学(二十二)…………… 8～9
- 高野山の文書(十八)…………… 10
- 高野山霊宝館からのお知らせ…………… 11
- 新連載 高野山の生き物 第一回…………… 12

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

令和元年度第40回高野山大宝蔵展

「高野山の名宝 — きらめく漆工の美 — 」

令和元年7月20日(土)～10月6日(日)まで

前期 7月20日(土)～9月1日(日)

後期 9月3日(火)～10月6日(日)

会期中無休



重文 大日如来坐像 (伽藍西塔旧在)
平安時代 金剛峯寺
高野山では5年ぶりの展示



弘法大師坐像 (万日大師) 室町～桃山時代 金剛峯寺
こちらも高野山では5年ぶりの展示です。



国宝 澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃
平安時代 金剛峯寺
平安後期の漆工芸品を
代表する優品

主な展示品

彫刻

重文 大日如来坐像 (伽藍西塔旧在)

重文 狛犬像

未指定 弘法大師坐像 (万日大師)

金剛峯寺

天野社

金剛峯寺

昭和五十五年(一九八〇)、「靈宝展」として始まった高野山靈宝館の特別展は、昭和六十三年(一九八八)に「大宝蔵展」と名称を変えて開催され、今回で四十回目となります。昭和、平成、そして令和という新しい時代を迎え、今後も高野山の歴史と文化を伝える数多くの文化財をご紹介していくことでしよう。

今回の大宝蔵展では元・伽藍西塔の本尊で、高野山開創から間もない時期の作とみられる大日如来坐像(重文)を高野山では五年ぶりに公開し、また澤千鳥螺鈿時絵小唐櫃(国宝)をはじめ漆工の名品を中心に、貴重な宝物の数々を展示いたします。

振り振り毬打形花器及台（新清和院下賜）
江戸時代 金剛峯寺



重文 狛犬像 鎌倉時代 天野社

新発見！

圓通寺
はちまんしせんほうとう
八万四千宝塔
特別公開



於 本館隅廊・西廊

※ 詳細は11ページをご覧ください。



梨地蝶菊文蒔絵文箱（宝簡集三四・三五旧箱）
江戸時代 金剛峯寺



梨地鳳凰蒔絵合子 江戸時代
金剛峯寺

※ミュージアム法話

（お坊さんによる法話と展示解説）

7月20日(土)・8月3日(土)

8月17日(土)・9月14日(土)

いずれも13時より約45分間

予約不要、参加費無料（要拝観料）

※ミュージアムトーク

（学芸員による展示解説）

9月21日(土)

13時30分より約1時間

予約不要、参加費無料（要拝観料）

次回予告

令和元年度秋期企画展

「祈りのかたち－密教法具の世界－」

令和元年10月12日(土)～

令和2年1月13日(月)・祝

◎文化財の保存上、展示品が変更される場合があります。
◎期間中、一部展示替を行います。

- 工芸
 - 国宝 澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃 金剛峯寺
 - 未指定 梨地金銀蒔絵采配串（武田信玄所用） 成慶院
 - 未指定 梨地鳳凰蒔絵合子 金剛峯寺
 - 未指定 流水柳松蒔絵硯箱（恭礼門院遺品） 金剛峯寺
 - 未指定 振り振り毬打形花器及台 金剛峯寺
- 書跡
 - 国宝 金銀字一切経・附経筒 金剛峯寺〔前後期入替〕
 - 国宝 後白河院御手印起請文（宝簡集三四）・旧箱 金剛峯寺〔前期〕
 - 国宝 後醍醐天皇勅願文（宝簡集三九）・旧箱 金剛峯寺〔後期〕
- 絵画
 - 重文 丹生・狩場明神像 金剛峯寺〔前期〕
 - 重文 愛染明王像 金剛峯寺〔後期〕
 - 未指定 佐竹本三十六歌仙絵巻（影印本）・寄附状 益田孝他寄附
 - 靈宝館

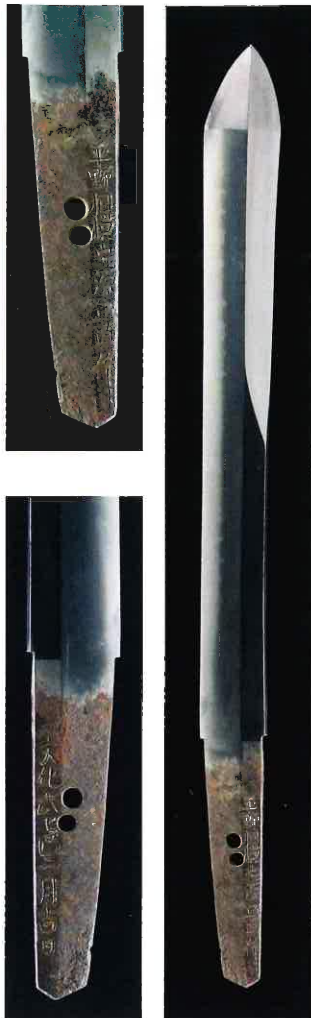
収蔵品の紹介 103



目貫は能で鬼女（蛇体）が用いる般若の面と打杖を組み合わせています。



小柄と筭を外したところ



短剣（正直作）・朱塗鞘 一具

黒田直方奉納 鉄製鍛造（短剣）

江戸時代 文化六年（一八〇九） 金剛峯寺蔵

短剣…全長四〇・六cm 刃長二九・七cm

能「道成寺」をモチーフとした意匠

「短剣」という名称に「？」と思う方がいるかもしれません。片方に刃があるものは刀、両方に刃があるものを剣と呼びます。本品は片側全面と、もう片側には半分、刃がついているため「短刀」ではなく「短剣」です。茎の銘によると、この短剣は文化六年（一八〇九）に「平野相模守源正直」という刀工によって造られたものです。正直については詳しいことは分かりません。上総国（千葉県）正直という人物が名工として知られていますが、銘の書体が違いますし、こちらは嘉永年間（一八四八～五五）に活躍しているため、別人でしょう。

凝った拵（刀装）が特徴的で、柄の両面には鐘と般若の面をあらわした銀製の目貫（金具）がつけられています。鐘と鬼女というと特に和歌山の方は、道成寺（和歌山県日高川町）の「安珍・清姫」の伝説が思い浮かぶかと思えます。正確には、この物語をもとに作られた能の演目「道成寺」をテーマに全体のデザインが統一されています。朱塗塗の鞘には両面に「花の外にはまつはかり く／＼暮れそめてかねや／響くらん（花の外には松ばかり。（くり返し）。

暮れ初めて鐘や響くらん。」という文字が蒔絵であらわされています。これは「道成寺」の中の有名なフレーズで、縁や頭に刻まれた、桜と松の文様はこれに由来します。また小型ナイフのような小柄の鼓と扇、箸のような筭（割筭）の鼓と笛は能に関係する絵柄です。附属する奉納目録によると、文化八年（一八一）に上総国久留里藩（現在の千葉県君津市）第五代藩主の黒田直方（一七七八～一八三二）によって丹生・高野両明神に奉納されました。更に直方は後年、数回にわたり太鼓や刀を両明神（伽藍の御社）に奉納しています。

神社へ刀剣を奉納することは古来より行われてきましたが、太平の世となった江戸時代には武器としての意味合いが弱まり、趣向を凝らしたデザインの刀装具が発達しました。本品が奉納のために制作されたのか、元々所有していたのかは分かりませんが、和歌山の伝説（男女の愛憎入り交じる、少々恐ろしい物語ですが）ゆかりの品が、高野山に伝わっているという点でも興味深いものです。

（福形安希子）

連載

高野山の古建築 第三十四回

重要文化財 金剛三昧院 客殿・台所(二)

鳴海 祥博



大広間の全景 三十畳敷きの大広間は、法要などの行われる客殿の中心となる部屋である。十四面の金色の襖には、雉子と老梅が連続して描かれている。



大広間と「角の間」境の襖を開けた状況 大広間と「角の間」の間の襖を開けると、大広間の老梅の襖絵は「角の間」の襖へと連続している。大広間と「角の間」を融合させる巧みな演出である。



「次の間」から「上段の間」「上段」を見る 上段の間は賓客をもてなす場で、豪華な書院造りとなっている。次の間の天井は「竿縁天井」、上段の間は「格天井」。写真では見えないが「上段」は「折り上げ小組格天井」である。



「上々段」の天井 「次の間」から「上段の間」「上段」「上々段」へと、天井はその意匠を異にする。「上々段」は最も豪華で、中央に鳳凰の彫刻を嵌め込んだ「折り上げ吹寄せ小組格天井」となっている。

江戸時代の初めに建てられた金剛三昧院客殿の中を案内しましょう。正面の大きな玄関を入ると、「杉戸」に囲まれた「中門」という広い板敷きの部屋があります。中門を境に右手が台所、左手が客殿となっています。客殿は正面側に「大広間」と「角の間」の二室が並び、その奥側は「持仏の間」「上段の間」「土室の間」など大小九つの部屋に区切られています。三十畳敷きの大広間は、「持仏の間」に対する礼拝空間であるとともに、院内で行われる法会に使われる主室です。部屋境の襖には、鮮やかな金地に老梅と雉子の絵が十四枚の襖全てに渡って連続して描かれています。客殿は建造物として重要文化財に指定されているのですが、この襖の「金地著色梅花雉子図」はまた別に美術工芸品として重要文化財に指定されています。建物と襖絵が重複して指定を受けているのは珍しい事例

で、これは客殿が、建物としての空間構成だけではなく、そこを荘厳する紺碧障壁画と相まって、かつての高野山の寺院の姿を今に伝える貴重な歴史遺産だということでしょう。大広間に続く十畳の「角の間」は、ふだんは襖で仕切られていますが、襖を取り払うと更に大きな四十畳の一室として使用できます。部屋境の鴨居上にはとても細かな縦棧を並べた「箴欄間」という欄間が入れられています。これは二室を一体で使う時の、空間的な融合を計るための工夫のようです。また部屋境の襖を取り払ったときに、大広間の老梅の襖絵が、「角の間」の襖絵と連続する構成となっているのは、驚きです。「角の間」の北の襖を開けると、そこには「次の間」「上段の間」「上段」と部屋が続きます。上段の正面には部屋一杯の広い「床」、右手には「帳台構え」という小さな四枚立ての襖のような設え、左手には二畳敷きの「上々段」があります。上々段には「違い棚」と「付け書院」が備えられています。付け書院は室町時代の勉強机に起源があるとされるものです。

これらの部屋の襖や壁も、紺碧障壁画で豪華に飾られています。「床」「違い棚」「帳台構え」「付け書院」は、桃山時代に成立した「書院造り」の基本となる設えです。この上段の間を中心とする部分には、書院造りの典型的な建築空間を見ることができるとは、驚きです。上段の間は、有力な檀信徒や山内の高僧など、賓客をもてなす場、饗応の場として用意されたものなのです。「次の間」「上段の間」「上段」「上々段」は、奥に進むに従って、建築的な意匠が変わります。とても気付きにくいのですが、それは天井です。「次の間」は「竿縁天井」、「上段の間」は「格天井」、「上段」は「折り上げ小組格天井」、「上々段」は「彫刻入り折り上げ吹寄せ小組格天井」と、奥に進むに従って天井が豪華で手の込んだ造りとなっています。その天井の下に座る人の社会的地位を象徴しているようです。封建制の名残、と批判されるかも知れませんが、歴史の一面を伝える意匠です。機会があれば是非一度、金剛三昧院客殿の歴史に触れていただきたいと思います。

特集 平成三十年度の文化財保存修理事業

高野山には数多くの国宝、重要文化財がありますが、保存状況が良好でないものが数多くあります。

これらは、経年劣化などによる損傷の補修部があり、また後世の後補部を除去することで、熟覧や展示などが可能な安定した状態にすることを目指しています。

そして、これらの文化財を未来に引き継ぐことを目的としています。

公益財団法人高野山文化財保存会・高野山霊宝館では、毎年継続的に国、和歌山県、高野町からの補助金をいただいで、文化財の保存修理事業を行っております。平成三十年度は二件の事業がありましたので、事業内容をご報告いたします。

◎平成三十年度 重要文化財 紙本著色十卷抄ほか一件保存修理事業

【文化財名称】

①重要文化財
紙本著色十卷抄

十卷のうち巻二、巻三 圓通寺蔵
②重要文化財
紙本白描 不動明王二童子毘沙門天図像

一幅 圓通寺蔵

【事業目的】

密教図像を描いた①紙本著色十卷抄、および②紙本白描不動明王二童子毘沙門天図像について、経年劣化などによる損傷の補修を行うことで、熟覧や展示などが可能な安定した状態にすることを目指しました。

【全体の事業期間】

①平成二十九年年度～令和三年度まで
(五カ年継続事業)
②平成二十九年度～平成三十一年度まで
(三カ年継続事業)

【事業体制】

補助事業者
(公財) 高野山文化財保存会
請負業者
(株) 坂田墨珠堂



図1 十卷抄 補修紙補填作業



図2 十卷抄 絵具・墨の剥落止め作業

【事業費および補助金額、収入先明細】	
五カ年総事業費	27,222,598円
平成三十年度事業費	6,816,935円
国庫補助金	3,748,000円
和歌山県補助金	383,000円
高野町補助金	53,000円
所有者(圓通寺)負担金	2,632,935円
(補助率55%)	

【平成三十年度修理内容の概要】

①紙本著色十卷抄(全十卷)について、巻二および巻三の本紙に押しをかけて平らに整えたのち、欠失箇所へ補修紙をあてて補いました。

②旧肌裏紙および旧補修紙を除去し、本紙補強のための極薄楮紙の裏打ち、本紙欠失箇所の補填を行いました。

◎平成三十年度 重要文化財
木造四天王立像保存修理事業

【文化財名称】

重要文化財

木造四天王立像のうち持国天立像・増長天立像 二躯
金剛峯寺蔵

【事業目的】

平安時代（十世紀）の作である四天王立像について、経年劣化などによる損傷の補修や後補部の除去を行うことで、熟覧や展示などが可能な安定した状態にすることを目指しました。



図3 十巻抄 卷三 展示風景（修理後）



図5 増長天 補修箇所の色仕上げ



図4 増長天立像 右手第二指・持物補足



図8 四天王立像（増長天立像・持国天立像）展示風景（修理後）



図7 増長天立像（修理後）



図6 増長天立像（修理前）

【全体の事業期間】

平成三十年度～平成三十一年度まで
（二カ年継続事業）

【事業体制】

補助事業者

（公財）高野山文化財保存会

請負業者

（公財）美術院

【事業費および補助金額、収入先明細】

二カ年総事業費

8,668,980円

平成三十年度事業費

4,197,820円

国庫補助金 2,308,000円

（補助率55%）

和歌山県補助金 236,000円

高野町補助金 33,000円

所有者（金剛峯寺）負担金

1,620,820円

【平成三十年度修理内容の概要】

木造四天王立像四躯のうち持国天立像と増長天立像について、後補部の除去と亡失部の補足、方座の新補を行いました。

文化財の保存修理には、多額の費用を要します。高野山文化財保存会（高野山霊宝館）では、霊宝館友の会の年会費の一部を文化財の保存修理費用に充てさせていただいております。皆さまの文化財保護へのご理解ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。（鳥羽正剛）

◎友の会会員募集

- ・会員証提示で会員様ご本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- ・年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

一般会員（個人） 3,000円

賛助会員（法人） 30,000円

皆様のご入会をお待ちいたしております。

石塔の銘文を読む④

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

表1 集団が高野山に造営した五輪塔一覧 (銘はすべて地輪に記載)

年号	銘文
興国四年	1343 「河内国錦部郡足力庄住人等廿余人」
正平十二年	1357 「河内国錦郡一結衆等」
正平十八年	1363 「一結衆十三人」
応永二年	1395 「一結諸衆」
応永三年	1396 「一結衆」
文安四年	1447 「結衆等廿八人」

【紀伊国金石文集成】より抜粋

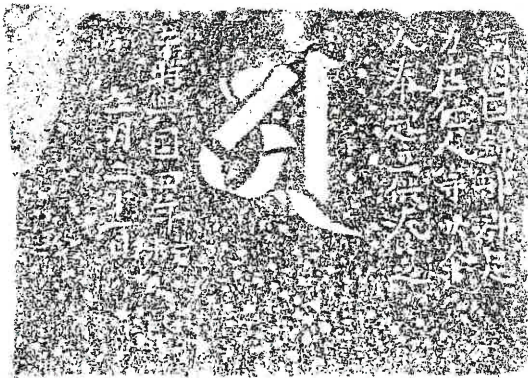


図1 興国四年銘五輪塔地輪拓影



写真1 興国四年銘五輪塔地輪

多人数による造塔供養

このシリーズの第七回において、多人数による納骨の事例を紹介しま

した。ここではそのことについて、銘文を観察しながら少し考えてみたいと思います。『紀伊国金石文集成』という和歌山県内の石塔などの銘文

を集めた本によりますと、高野山には多人数が一組となって造塔した事例が知られ、一四〜一五世紀で六例を数えます。

表1は第七回の再録ですが、その筆頭に掲げた興国四年(一二三四三)の五輪塔地輪に記載された銘文を読むことから始めましょう(図1・写真1)。この塔は砂岩製で、地輪の幅が三三・五センチ、高さ二三・八センチを測るもので、奥之院三十町石付近に所在したのですが、現在は霊宝館で保管中です。

河内国錦部郡足力庄住人等廿余人奉起立供養之

「ア(梵字)」

于時興国四年^美未[※]美[※]は癸の異体字
三月二十一日

要約しますと、「河内国錦部郡足力庄の住人ら二十余人が思いを抱いて立ち上がり、これ（石造五輪塔）を供養した。興国四年（一三四三）三月二十一日」となります。いろいろ興味深い字句が並びますが、まず造立の月日が弘法大師空海のご入定の日に合わせて供養していることが注意されます。この日に合わせた事例は他にもありますので、弘法大師信仰に基づく造立であったことがうかがえます。

また、河内国錦部郡足力庄（大阪府富田林市甘山付近）の近在に当たる、錦部板持（富田林市西板持・東板持付近）の地名を示す石塔も高野山奥之院から見つかっています。残念ながら今は所在不明ですので『紀伊国金石文集成』からその銘を拾っておきます。「正平十二年丁酉三月二十一日敬白／ア（梵字）／河内國錦部板持／一結衆ホ」は改行、ホは等の異体字）と見えます。造営は正平十二年（一三五七）ですから先の塔より十四年遅れますが、同じく弘法大師のご入定日である三月二十一日に供養されています。この板持という地区には、文保三年（二二二九）の銘を持つ十三重石塔が今も残されています。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて、造塔を

中心とした活動が盛んに行われた地域であることが窺えます。そうした環境の中で、板持の「結衆が形成されたものとみられます。

一結衆とは

ここで一結衆について触れておきます。表にもあるように、高野山にはこの一結衆の銘を記載する石塔が四例知られています。続く正平十八年（一二三六）の資料ではその一結衆は十三人で構成されていたことが分かります。ではこの一結衆とはどういう集まりなのでしょう。

一結衆は、結衆や結縁衆などとも言われ、仏道に縁を結ぶために世俗の人々が、僧侶の指導のもとで造塔

などの活動をする集まりです。

一結衆の銘がある具体例として、奈良県奈良市の忍辱山墓地にある五輪塔（元亨元年／一三二一・写真2）があげられます。この塔の基壇部分には納骨用の小穴（写真3）が設けられていて、そこから結縁者の遺骨を埋納したようです。同じく奈良県山添村大西墓地の五輪塔（正中二年／一三二五）にも一結衆の銘があり、納骨施設が伴っています。いずれも墓地の中心に建立されたものです。これらの事例から一結衆の活動として墓を整備するとともにその中心となる石塔を建立し、結縁者の死後、塔下に納骨を行うような集団であったと思われる。その活動の一環として地元の墓に納骨するだけではな

く、高野山奥之院にも集団で納骨を行ったことが、今回紹介した銘文から窺われます。

忍辱山墓地や大西墓地の石塔は、その形態から西大寺系の律宗教団が関与した造営であることを窺わせませんが、高野山にも一結衆による造塔・納骨が行われた事実を踏まえ、高野山に於ける活動の一つに、一結衆のような集団を構成して納骨を推進する動きがあり、それを広めていた人たちが存在したことを教えてください。また、前者の造営時期は一四世紀前期頃が中心ですが、高野山のそれは少し遅れて、一四世紀中頃から後半に中心があるようです。結縁による納骨行為が地域へ定着した後に、高野山へも納骨を行うという、一つ上積みされた行為を

広げていったことが見て取れます。高野山による勧進活動が積極的に各地へと広がり、高野山への納骨を広めていたことが知られます。

【参考文献】

- 『紀伊国金石文集成』真陽社、一九七四
- 『大阪府の地名』（日本歴史地名体系第二八卷）平凡社、一九八六



写真2 忍辱山墓地五輪塔



写真3 忍辱山墓地五輪塔基壇にみえる納骨孔

高野山の文書 (十八)

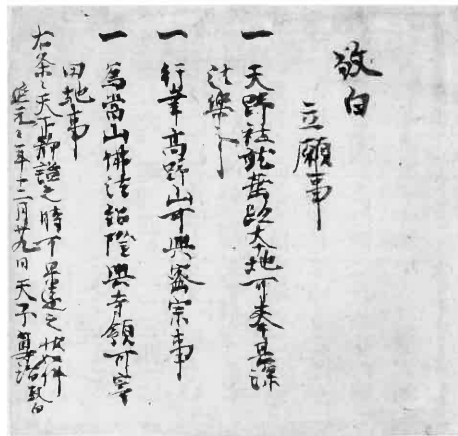
「後醍醐天皇勅願文」——諱と諡——

今回紹介する文書は、後醍醐天皇(一二八八―一三三九)が延元元年(南朝年号、一三三六)十二月二十九日に高野山に奉納した願文です。願文とは、神仏に願いを立てる時に、願いの趣旨を記す文書です。その内容は、「天野社(丹生都比売神社、和歌山県かつらぎ町)は、高野山の本地垂迹(神仏習合の考え方の一つで、仏が神に姿を変えて衆生を救済しているという説)の神社なので、十分に法楽(神仏へのお経や音楽、芸能の奉納)を営みます。高野山に参詣し、真言密教を興隆さ

せます。高野山の仏法を興隆させるために、寺領を興し、田地を寄進します。これらの事は、天下が安寧になつた時に必ず果たします。」というものです。

後醍醐天皇は、鎌倉幕府を滅ぼし、建武の新政を行ったことや、その新政が武士の反発を招き、足利尊氏(一三〇五―五八)に叛かれて吉野(奈良県吉野町)に逃れ、南朝を開いたことで有名な天皇です。実は、後醍醐天皇が京都を逃れたのは、延元元年十二月二十一日と願文奉納の八日前のこと、京都を逃れ

てすぐ高野山にこの願文が奉納されたことになりました。そのため、願文に記された「天下が安寧になる時」は、足利尊氏を中心とする京都の北朝を滅ぼし、南朝が再び京都で政治を行うことを指すと考えられます。そのために高野山・天野社の神仏の加護、また高野山が持つ現実的な力を欲したのでしょうか。しかし、願文奉納の翌年、建武四年(北朝年号、一三三七)一月四日付の「足利直義御教書」(『宝簡集』巻四〇所収)には、尊氏の弟直義(一三〇六―五二)が、「後醍醐天皇が高野山



「後醍醐天皇勅願文」(国宝『宝簡集』巻39所収 金剛峯寺蔵)

〔翻刻文〕

敬白

立願事

- 一 天野社就垂跡本地可奉甚深法樂事
- 一 行幸高野山可興密宗事
- 一 為当山仏法紹隆興寺領可寄田地事

右条々天下静謐之時可果遂之状如件

延元々年十二月廿九日 天子尊治 敬白

さて、願文末尾の署名には、「天子尊治」とあります。「天子」は天皇を指し、「尊治」は後醍醐天皇の諱(実名)です。古来より、尊貴な人物の諱の使用ははばかられましたが、神仏に奉納する願文に署名する際には諱が用いられました。「後醍醐」という名前は、諡という死後に贈られた名前です。そのため、後醍醐天皇本人が「後醍醐天皇」と署名することはありません。ただし、後醍醐天皇は生前より自分で諡を決めていた天皇の一人で(遺諡といいますが)、この点は通例の天皇とは違うところ、かなみに、諡は天皇以外にも贈られます。高野山を開いた弘法大師空海の「弘法大師」は、空海の入定後に贈られた諡です。空海を「お大師様」と呼ぶのは、諱を避けて敬うという、昔からの習慣の表れといえるでしょう。

(研谷昌志) ※大宝蔵展で展示します。(後期)

高野山霊宝館からのお知らせ

◎「紡ぐプロジェクト」の一環で高野山の宝物を修理

「紡ぐプロジェクト」が2019年度から修理を行う文化財8件に、重要文化財「執金剛神立像・深沙大将立像（快慶作、鎌倉時代、金剛峯寺蔵）」の像内納入品が選ばれ、現在修理中です。深沙大将立像から見つかったお経『宝篋印陀羅尼』は断片化して判読が困難なものがあり、修理によって新たな発見があるかもしれません。

「紡ぐプロジェクト」とは？

優れた日本の美を保存・継承するため、文化庁、宮内庁、読売新聞社が連携し、貴重な美術品や文化財の「保存・修理・公開」を一体的に推進するプロジェクトです。展覧会での公開などを通じて得た収益や多数の協賛企業の支援を生かして貴重な作品のデジタル保存、ウェブによる対外発信、文化財修理を国内で初めて一体的に進めます。

◎ミュージアムトークとミュージアム法話

春期企画展開催期間中にミュージアムトーク（2回）とミュージアム法話（3回）が開催されました。文化財や高野山について、より深く知ることができると参加者の皆様にはご好評いただいております。



◎久保田昌孝画伯筆 屏風「豊饒」奉納と収蔵

現代美術家の久保田昌孝氏（大阪府出身）から屏風作品「豊饒」が金剛峯寺に奉納され、5月7日（火）、奉納式が行われました。金剛

峯寺でお披露目された

のち、6月

11日（火）に当館に収蔵されました。

今後、金剛

峯寺や当館

で不定期に公開予定です。



新発見！「圓通寺」八万四千宝塔」概要

4月某日、圓通寺（別名 円通律寺、事相講伝所。お寺については霊宝館だより127号「高野山の古建築」で紹介しています）より1本の電話が霊宝館にありました。本堂で多数の木製五輪塔が見つかった、ということです。職員が確認に行きましたところ、位牌棚の下にある押し入れに16箱もの木箱が安置されていました。箱のうち1つは蓋が無く、中には高さ約9cm、幅約3cm、奥行約3cmの木製で無彩色の五輪塔が多数、納められていました。観音



開きの扉がついた1箱と、一部が朽ちた箱の中を見ますと、同様の五輪塔がびっしり詰められており、残りの13箱は密封されています。これら五輪塔の多くには梵字・名前・願文など墨書がありました。底には円柱状の木栓が見

られ、このうち1つを開けてみると、墨書された小さな紙が中に納められていました（3ページ写真）。箱には天保7年（1836）に圓通寺の先師である龍海和尚が発願・供養し、弟子の隆鎮和尚が現状の箱に納めたことが記されています。また「寶塔八萬四千基内」とあるのは紀元前3世紀頃、インドのアシールカ王が釈尊の遺骨を八万四千に分けて、各地にそれらを納める仏塔を作った、という故事に由来し、五輪塔の底にも「八万四千内」と記されているため、この木製五輪塔群の名称として使用しました。ただし実際の五輪塔の総数は、箱の別の面に記された「一萬五千二百十八箱入」という数に近いようです。

これほどの数の木製五輪塔がまとまって見つかった例はほとんど無く、造塔の経緯やどのような信仰の形態が背景にあるのかなど、これらの調査が進むにつれて、今後さまざまな発見があると思います。



圓通寺にて。左の箱は高さ約1メートル。奥の押し入れには横になった箱が見えます。

新連載

高野山の生き物

第一回

高野山の霊鳥（ブツポウソウとコノハズク）

高野山寺領森林組合 西田 安則



ブツポウソウ 中国山地にて撮影（写真提供 林育造氏）

昭和十年（一九三五）日本の鳥学会で驚きの事が判明しました。今までブツポウソウという鳥が、夜になると「ぶっ・ぼう・そう」と鳴くと信じられていたのですが、NHKのラジオ放送をきっかけに「ぶっ・ぼう・そう」と鳴く鳥が手のひらサイズの小さなフクロウの仲間コノハズクであると判明したのです。以後ブツポウソウを姿のブツポウソウ。

コノハズクを声のブツポウソウと呼ぶことになりました。古来より、高野山では、三法を鳴き分ける霊鳥が棲んでいると言われていました。三法とは、仏（ほとけ）・法（ほとけの教え）・僧（それを伝える僧侶）のことだそうです。戦後高野山の森林はほとんど伐り開かれ昭和三十年代前半にはついにコノハズクの声が聞こえなくなり、



コノハズク（写真提供 新城市 鳳来寺山自然科学博物館（愛知県））

ブツポウソウは平成になっても時々姿を見かけたのですが、全国的な減少に伴い今では姿を見ることも無くなりました。さて、もう高野山にはコノハズクもブツポウソウも戻ってこないのでしょうか？コノハズクは、高野山近

くの奈良県野迫川村の立里荒神社付近の森林で鳴き声を聞くことが出来ますし、ブツポウソウも中国地方を中心にやや復活の兆しが見えてきています。高野山においても多様な環境と森林整備をすることにより昭和、平成に減ってしまった両種を令和の時代に復活してほしい

ものです。なお、最後になりましたが一二八号まで「霊宝館の庭園」で多くの植物を紹介してくださった亀岡先生は高野山高校の時の生物の先生で、私が林業の道に進むきっかけとなった恩師です。長い間楽しく興味深いお話をありがとうございました。

（次回は一三三号に掲載予定です。）